



『阿知3丁目は昭和の時代には商人のまちで、経済力のある商人が数多く住んでいました。』

内田家6代目当主 内田耕太郎氏

本ワークショップでは、地元で暮らす人、仕事を営む人の体験談を交えながらまちを歩くことで、時代とともに忘れられつつある地域の伝統文化や生活文化を学生たちが聞き手となって学び、地域との繋がりを深め、後世へ伝承する担い手となる倉敷若衆への育成を目指しております。

本年度、第2回目となるまちなかワークショップは、「阿知町よもやま話」をテーマとして、内田家6代目当主の内田様を講師にお招きしました。内田様が旧家の建物(現:蔵pura)を購入し、お店としてもう一度蘇らせたいきさつと思いや、阿知町の歴史とまちづくりについてお話をいただきました。

「激動の時代を生きてきた内田家」

「内田家は私で倉敷に出てきてから6代になります。屋号は『尾原屋』と言いまして、児島の由加山の北側にあります尾原村の出であります。下津井に1代茶屋町に3代暮らし、文政9年に倉敷に出てきて古着屋から始め呉服屋に成って行ったと聞いております。次第に商売も上手いき土地を購入したりして地主になっていきました。明治の初めごろに倉敷義倉の一員になったことを喜んでいました。戦前までは、順調にいていましたが戦後に財産税や農地改革で5代目の父は大変苦勞をしました。沢山の地主が苦勞した時代だと聞いております。現在は、7代目の息子が不動産の賃貸業を営んでいます。」

「子供のころの思い出のまちを守りたい」

「現在、蔵puraと呼ばれているこの建物は以前は小河原家の建物でした。子供の頃から見ていた思い出のある建物がなくなるというお話を聞き、放っておかず、平成10年に賃貸として土地と建物を購入しました。このとき、建物は所々壊れていたのですが、私は『自分がこの建物でお店をすることで、元々繁華街だったこの地域が甦る起爆剤にならないか』と思い、改修などのためにお金を借りてお店をはじめました。13年間、中華屋や和食屋などとしてお店をした後、別の人がお店を貸りて、現在の和食とそばやを営む蔵ぶら〜らになりました。」

「昭和の阿知3丁目は『商人のまち』といえるほどの賑わいだった」

「阿知3丁目は昭和の時代には商人のまちで、呉服屋が通りに軒を連ねて並んでいました。また、建物にも力を入れていることから、この周辺には経済力をもった商人が多いです。大橋家前の道が旧阿知町^{※1}の通りで、倉敷の中心商店街だったため昭和の始めくらいまでは非常に賑わっていました。また、私の近所の字が『井上茶園』だったことから、以前は古録のひとつ、井上家の茶園だったのではないかという説もあります。」
内田さんの親戚:内田鎌太郎さんが撮影された昭和と平成の倉敷を見ると、まだ地面が舗装されておらず、米俵を大量に積んだ大八車があることから、馬や牛などの家畜が引っ張って運んでいたことや、様々なお店が通りに面して並んでいた様子が見られます。

「今ではお店をしなから暮らしているところも少なくなり、閑静なまちになっています。住む点では静かが良いと思いますが、昔を思うと少し寂しく感じます。」



※1: 旧阿知町は、現在の住所で阿知2丁目の一部と阿知3丁目の一部にあたる

「内田氏「何を以て『活性化』といえるか。原点を考えながら、思いを馳せることが大事。」

阿知町では、二か月に一度まちで暮らしている人を集めて、「まちを活性化するにはどうしたらいいか」という話し合いをしているそうですが、住んでいる人、商いの人、観光によって価値観は違うため、なかなか難しいそうです。このまちで暮らしている人の数だけ、考えや思いがある。誰にとつての「活性化」か、何を以て「活性化」というのか、生活環境も豊かになり、多様な価値観が生まれた現代では、ひとつにまとまるということは殊更難しい。では、自分はこのまちとどう関わっていききたいか。内田さんの子供の頃の思い出も含めたまちへの思いの原点を聞きながら、私は未来の倉敷へ思いを馳せました。



愛宕神社

愛宕信仰とは、京都の愛宕山山頂に鎮座する火防の神に対する信仰。火の用心として、阿知町町内でも代々守られている。倉敷にも愛宕神社がある。左の写真は文化9年の版木で刷られた版木画。

倉敷義倉

江戸時代の倉敷村において民間主導で設立された相互扶助組織のこと。江戸時代中期の明和6年に、「義衆」と呼ばれる倉敷村の有力者74人が毎年自発的に麦を出し合い、その貸付利息は災害や飢饉による難民や生活困窮者の救済に充てられた。倉敷義倉は、藩主導ではなく、民間主導で設立・運営されたのが特徴。